

「大丈夫だと思うんですけど、保険でカバーされるか確認してからでいいですか」。

診察の途中で、患者の口から思いがけない言葉が飛び出した。最初は耳慣れない響きに戸惑ったが、すぐに気づく。ここはアメリカ、日本ではないのだ。国民皆保険に守られた環境とは違い、アメリカでは自分の加入している保険がどこまでカバーしてくれるのかを常に意識しながら医療を受けなければならない。その一言に、この国の医療制度の現実が凝縮されているように感じた。

2025 年 8 月 16 日から 31 日まで、私は金沢大学附属病院主催の海外研修プログラムに参加した。わずか 2 週間という短い時間だったが、英語での医療面接や身体診察、ACLS コースの受講、日本人研究者が率いるラボの訪問、そしてニューヨークの診療所見学と、濃密で充実した日々だった。特に心に残ったのは、ニューヨークで見た診療の現場である。

見学したのは 2 つの診療所。いずれも日本で生まれ育った医師が所属し、ニューヨークに暮らすあらゆる人々に門戸を開いていた（実際には日本語話者が半数近くを占めていたが）。診療所の朝は、日本とよく似ていた。医師たちはパソコンを立ち上げ、予約リストに目を通し、空き時間にメールを返す。診察室では患者の主訴を聴き、必要な身体診察を行い、治療方針を話し合い、納得した患者が帰っていく。診察時間が昼休みに食い込んだ結果急いで昼食をとる姿も、日本と変わらない光景だった。

ただ一つ、大きく違ったのは「時間の使い方」だった。患者一人に少なくとも 15 分、初診であればさらに長い時間をかける。結果的に一日に診られる患者数は限られるが、その分だけ医師と患者の対話は濃密だった。

もちろん、制度的な背景がある。アメリカではプライマリ・ケア医がゲートキーパーとなり、まず家庭医や内科医に連絡するのが一般的だ。しかし当日受診は難しく、数日先の予約となることもしばしば。どうしてもすぐに診てもらいたければ、急患クリニックや救急外来に行くしかない。その結果、高額な医療費が請求される。だからこそ、人々は「少しの不調なら様子をみよう」と考えるのだろう。薬局やスーパーに並ぶ解熱鎮痛薬や胃腸薬、アレルギー薬の棚を見れば、その発想が生活の一部になっていることが分かる。

一方で、アメリカの医療には思わぬメリットもあった。診察時間は日本より長く、待ち時間は短い。日本では病院に行けば半日かかり、という印象があるが、ここでは短い待ち時間と医師としっかり話す診察時間が確保されている。医師との十分なコミュニケーションは、患者にとっての満足につながるのではないかと私は感じた。

診療所見学の後、興味本位で友人とニューヨークの大手ドラッグストアを訪れた。すべての一般薬が、透明な鍵付きケースに入れられてずらりと並んでいたが、これは都市部で急増する万引き対策だという。欲しい薬を手取るには必ず店員を呼ばなければならず、買う予定のない自分は声をかけることをためらってしまったことだけが心残りである。誰でも簡単に薬を買える一方で、高額な医療費に阻まれ、本当に医師の診察が必要な人でさえ受診を控えてしまう現実。その対比を目の当たりにして、「アクセスの良さ」と「制度の持続性」の間で揺れる医療の姿を考えずにはいられなかった。

アメリカの医療制度を全面的に肯定することはできない。しかし、日本の医療が学ぶべき点も多い。特に診察予約の必須化や、事前問診と電子カルテのシームレスな連携は印象的だった。日本ではいまだ当日受付や紙の問診票が一般的だ。小さな工夫の積み重ねが、効率性の向上だけでなく患者満足度の改善にもつながるはずだ。

渡米前に制度の概要を学んでいたものの、現場を見て初めて実感を伴って考えることができた。医療制度は文化や価値観と深く結びついている。その現実を肌で感じられたことは、文献にはない大きな学びだった。これからも、主体的に学ぶ姿勢を大切にしながら、日々の研修に

臨みたい。

Shadowing Day 1

桑間雄一郎先生と



Shadowing Day 2

澤井未央先生と

